

タブロイド地域紙「市民プレス」第66号(2014/10/5発行)の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次

PAGE 2 歴史を紐解く 南北朝と足利政権 その二 室町幕府の成立!

- PAGE 2 尊氏の後継ぎは義詮に -PAGE 5 政権内の紛争に直面する・・・
- PAGE 9 南朝に降るか政権に帰順か -PAGE 12 二代將軍義詮も死去する
- PAGE 15 氏満が二代鎌倉公方を継ぐ -PAGE 16 武蔵平一揆の乱
- PAGE 19 後村上天皇は崩御される
- PAGE 20 南朝方の戦士だった後醍醐天皇の皇子たち
- PAGE 27 懐良親王と後継者 -PAGE 30 日明貿易の道を開く
- PAGE 31 義満は家督・將軍職を相続
- PAGE 33 南朝の行宮は吉野から賀名生、住吉へ -PAGE 37 南北朝の年表

歴史を紐解く

南北朝と足利政権 その二 室町幕府の成立!

足利尊氏の後継ぎは義詮に

正平十三年／延文三年(1358)四月、尊氏が死没し、十二月、嫡男の義詮は征夷大將軍に任ぜられ、翌年二月、武蔵守を兼任する。

義詮の生い立ちは・・・

二代將軍となった義詮は、元徳二年(1330)尊氏の三男(二人の庶兄⇨婚外子の兄⇨につづく)として鎌倉に生まれる。母は北条久時の娘赤橋登子、幼名は千寿王。元弘の乱で尊氏が西上すると、人質として母と共に鎌倉に抑留され、以後鎌倉で少年期を過ごした。

観応の擾乱が起こって、執政の任にあった叔父の直義が失脚すると、正平四年／貞和五年(1346)、入京して政務を執る。翌年、直義が、それまで敵対していた南朝に降り、反

撃に転じて尊氏軍を圧倒する。直義派に対抗するため、尊氏は義詮と共に南朝に降伏し、正平一統が行なわれる。次いで尊氏は直義を討つため東下すると、義詮は京都の守備を任された。しかし、正平七年／文和元年（1352）、閏二月、京都に侵入した南朝軍は、激戦のち神器と三上皇を奪って賀名生に帰還する。

南朝軍を抑えて小康状態に

一方、対する義詮は、北朝を存続させるため、正平八年八月、後伏見上皇の女御（光厳及び光明天皇の実母で、院号は広義門院）の西園寺寧子を治天に推し、彼女の孫を天皇に擁立した。北朝四代の後光厳天皇が即位して、神器も上皇も欠いたまま北朝を再建した。

南朝との講和も進行して・・・

賀名生に拉致された光厳上皇は、かねてから夢窓疎石に帰依していたが、正平七年（1352）八月に出家し、軟禁五年後の正平十二年二月、河内金剛寺より還京した。光明上皇は正平十年に京へ戻って落髪し、仏道に入ったとされる。また崇光上皇は賀名生で二年、河内金剛寺で三年あまりの幽閉生活を送るが、南朝の勢力が衰微して講和に傾くようになると、正平十二年（1357）に直仁親王（持明院統の皇族で、崇光天皇の皇太弟に立てられたが、吉野へと連行されて廢太子された）と共に帰京する。

「矢口渡」で新田氏謀殺される

成立して間もない武家政権と争ったことになる、宮方の要、新田義貞と長男の義顕は、尊氏方と争って敗れ、延元二、三年（1337-38）越前国で亡くなった。しかし残された次男の義興は、尊氏が没した半年後の正平十三年／延文三年（1358）、時期到来とばかりに挙兵して、鎌倉の奪還を目指した。これに対して尊氏の子で鎌倉公方の足利基氏と関東管領の畠山国清は、竹沢右京亮と遠江守江戸高重にこの迎撃を命じた。江戸高重とその甥下野守は三百余騎を率いて、十月、多摩川の「矢口渡」で義興（二十八才）を謀殺した。『太平記』によると、一族の蒲田忠武も首謀者として参加したという。のちに「渡し守」を交えた地歌舞伎「神霊矢口渡」がドラマ化され、演じられてヒットした。

義詮は南朝の掃討を始める

河内・紀伊国に出兵して南朝軍と交戦した義詮は、正平十五年／延文五年（1360）五月、拠点となっていた河内の赤坂城ほかを攻め落とした。金剛山の尾根上に築かれた赤坂城塞群は要害の地に在って「楠木七城」とも呼ばれた。下赤坂、上赤坂、



足利義詮像（宝篋院蔵）

宝篋院は、京都市右京区嵯峨野に所在し、将軍・足利義詮の菩提寺であるが、南朝方の忠臣・楠木正行の菩提寺でもある

千早の三城は、かつて楠木正成が足利方に対して抵抗する本拠として築城した。四方を絶壁に囲まれ、要塞堅固を誇った連郭式山城の千早城は、赤坂城の背後の山に築かれていた。

政権内の紛争に直面する・・・

尊氏が死去して仁木頼章が執事(後の管領)を退き、二代將軍義詮の最初の執事として細川清氏が任命される。清氏は南朝に対する大攻勢に参戦し、河内赤坂城を攻め落とした。ところが、その戦いの最中、畠山国清らの諸將と反目した仁木義長(頼章の弟)は、彼らの意を察知して本国・伊勢に逃れる。そして、翌、正平十六年/延文六年(1361)二月、南朝に降った。仁木氏は足利氏の一族で、同族の細川氏や高氏、上杉氏らとともに足利氏家臣団の主要メンバーでもあった。

仁木氏につづき細川清氏も

すると細川清氏は幕政の実権を握って、將軍義詮の意に逆らうことも多くなり、義詮を呪詛した、との佐々木導誉の讒言にあつて失脚する。その後南朝に走つて四国で再挙を図つたが、同年(三月改元して康安に)九月、將軍義詮は後光厳天皇に清氏の追討を仰ぐ。清氏は分国の若狭(現・福井県)に落ち延びる。

清氏は無実を訴えたが、十月には足利一門の斯波高経(建武三年/延元元年、越前守護と

して新田義貞と激戦を展開し、暦応元年/延元三年〔1338〕には、義貞を討ち取つて越前国を完全に掌握した武將)の軍に敗れ、比叡山を経て摂津天王寺に至り南朝に降った。十二月には楠木正儀・石塔頼房らと共に京都を奪取するが、直ぐ幕府に奪還された。

正平十七年/康安二年(1362)、清氏は細川氏の地盤だった阿波に逃れ、さらに讃岐に移った。白峰城(高屋城とも、現・香川県坂出市)に拠り、追討を命じられた従弟の細川頼之と戦つたが敗れ、ここが最期の地となった。

さらに畠山氏も失脚する

畠山国清は、足利義詮からの援軍要請を受けて関西に攻め上つたが、陣中の紛争に巻き込まれる。彼は軍勢を引き連れて関東に無断で帰還したので、攻勢に出た南朝によつて京都が一時失陥する事態を招く。国清は面目を失なう。

また国清は、鎌倉公方の基氏を執事として補佐していたが、正平十六年/康安元年十一月、基氏の家臣団から、罷免を求められて失脚する。領国の伊豆に逃れ、その地の豪族達を糾合しようとしたが協力は得られなかった。

一方、足利基氏は翌正平十七年(1362)、兵を率いて入間川を出る。伊豆に向かい、反乱を鎮圧して国清を追放した。基氏は鎌倉に帰還し、二度と入間川御所に入ることはなかつ

た。敗れた国清の消息は不明で、その年に没した、あるいはその二年後とも伝えられるが、定かではない。

義詮の政権は安定するか？

執事（後の管領）だった細川清氏が失脚して南朝に降ると、一門の長老となった斯波高経の力が強くなり、幕府の実権を掌握する。

正平十七年／康安二年（1362）七月、細川清氏が滅ぼされて空席となった管領職に。斯波義将（よしゆき 斯波高経の四男）が任命される。しかし、権力抗争は絶えず、義詮政権の運命は甚だしく流動的だった。

また、

「正平の大地震」が発生する

その前年のことになる。正平十六年／康安元年（1361）六月廿四日寅刻、西日本太平洋沖で大地震が発生した。

『太平記』、『後愚昧記』（公卿三条公忠の日記Ⅱ内大臣在職中Ⅱ）、『後深心院関白記』（重要文化財）などに、撰津四天王寺の金堂、奈良唐招提寺、薬師寺、山城東寺の堂塔が倒壊・破損したとの記録がある。

『太平記』には「山は崩て谷を埋み、海は傾て陸地に成しかば、神社仏閣倒れ破れ、牛馬人民の死傷する事、幾千萬と云数を知ず」と記述されており、多少の誇張はあっても、大方は史実に基づいていると見られている。

基氏は上杉憲顕を鎌倉に戻す

先年、畠山国清を討った基氏は、執事の後任として、高氏一族の高師有を任命したが、正平十七年、兄の義詮と諮って、上杉憲顕を越後守護に復帰させることを企てる。

かつて上杉憲顕は・・・

「観応の擾乱」のころに遡る。上杉憲顕は高師冬と共に基氏を補佐するが、直義方の上杉重能が高師直の配下に暗殺されると、直義方の憲顕は師冬と拮抗するところとなり、息子の能憲よしのりと共に尊氏に敵対する。正平六年／観応二年（1351）、鎌倉を出て上野に入り、常陸で拳兵した能憲と呼応して鎌倉を脅かす。ついに師冬を鎌倉から追い落として基氏を奪取し、甲斐に落ちた師冬を諏訪氏に攻めさせ自害に追い込んだ。更に直義を鎌倉に招こうとしたため、尊氏の怒りを買って上野・越後守護職を剥奪され、その代わりに宇都宮氏綱が越後・上野守護を拝命した。

翌正平七年／文和元年、直義が死去して観応の擾乱は終結するが、国内の諸将は憲頭から離反し、憲頭は信濃に追放された。この時、剃髪して道昌と号している。

しかし今度のシナリオでは・・・

宇都宮氏の職を解いて、上杉憲頭を越後守護に、という流れである。これを知った宇都宮家の家臣、芳賀氏一族は反発し、上杉氏の軍勢に対して抵抗する。正平十八年／貞治二年（1363）、越後に入った憲頭は、関東執事に復帰するため、基氏の命を受けて鎌倉に向かった。これを知って芳賀高名は、途中の上野で憲頭を討ち取ろうとする。しかし、武蔵苦林野（現・埼玉県毛呂山町）で基氏の追討を受け、果敢なくも敗れ去った。

鎌倉に戻った基氏は、上野・越後の守護職を公式に憲頭に与え、関東における足利勢力を固めることができた。

南朝に降るか政権に帰順か

この頃北九州から山陰地方を支配していた山名氏や大内氏などの向背が定まらず、ただし九州では懐良親王などの南朝勢力が健在だった。

北朝・義詮方に帰参するもの

山名時氏は縁戚に当たる足利尊氏に従い、守護大名として山陰地方に勢力を張っていた。その後直義・真冬に従ったが、将軍方の帰順工作が行なわれ、領国の安堵を条件として、正平十八年／貞治二年八月には義詮側に帰参して、以後は赤松氏や京極氏、一色氏と並んで四職（ししよく、とも）家の一つに数えられる名門の人となる。

また大内弘世は南朝に帰順していたが、将軍義詮が防長両国の守護職を認めることを条件として北朝への復帰を促したため、北朝に帰参した。

帰参するものは相次いで・・・

大内氏、山名氏が帰参して政権は安定化に向かい、また、かつては足利一門だったが、南朝に与していた仁木義長や桃井直常、石塔頼房も将軍方に帰参した。

勅撰和歌集の編旨が下る

尊氏が文人としても足跡を残し、勅撰集の武家による執奏（取り次いで奏上すること）という先例を打ち立てたことは、すでに前号で述べたが、義詮の連歌や和歌も後世に伝わっている。正平十八年／貞治二年（1363）、義詮の執奏によって、後光厳天皇より編旨（ひんしめし）（天皇のことが下り、勅撰和歌集の十九番目に当たる『新拾遺和歌集』が編集された。

三条坊門万里小路の新邸に

義詮は正平二十年／貞治四年（1365）二月、三条坊門万里小路の新邸に移る。彼はこの間に訴訟制度の整備に着手し、評定衆・引付衆を縮小して將軍の親裁権の拡大を図る（御前沙汰）。園城寺と南禅寺の争いでは、今川貞世に命じて、園城寺が管理する逢坂関等を破却させた。翌、正平二十一年、斯波高経・義将父子が失脚すると細川頼之を管領に任命した（貞治の変）。

三条坊門に邸宅を営んだ義詮は「坊門殿」と呼ばれたが、彼は室町季顕から「花亭」を買って別邸とした。「室町家」は公家で、別名を四辻家、花亭家ともいう。のちに「花亭」は足利家より崇光上皇に献上されて仙洞御所となる。さらに三代將軍の義満は再び天皇家から「花亭」を譲り受け、邸宅を営んだ。世にいう花の御所である。

基氏は関東の文化興隆に努める

鎌倉公方の基氏は武勇の誉れ高く、慈悲深い正直者だったといわれている。夢窓疎石の弟子の義堂周信を鎌倉に招き、五山文学や禅の普及を奨励するなど、鎌倉を核として、関東の文化の興隆にも努めた。

父の尊氏、兄の義詮と同様に文人の誉れも高く、冷泉家から歌道を学び、新千載和歌集に五首、新拾遺和歌集に八首、新後拾遺和歌集に三首、新続古今和歌集に一首の歌がそれぞれ収録されている。

だが基氏は、正平二十二年／貞治六年（1367）四月に死去する。二十八才。死因ははしかだったという。

二代將軍義詮も死去する

同年の正平二十二年、十二月七日、その年四月に亡くなった弟の基氏を追うように、義詮は死去した（享年三十八才）。死の二日前に鼻血を多量に噴出したと、三条公忠の日記『後愚昧記』は記している。義詮は死の直前に四国を平定した四国管領の細川頼之を招き、側室の紀良子との間に生まれた幼少の嫡男・義満の補佐を託したという。

三代將軍義満の時代へ

義満は、正平十三年／延文三年（1358）八月、京都の春日東洞院にあった政所執事、伊勢貞継入道照禅の屋敷で生まれる。初代將軍尊氏が亡くなって丁度百日目のことであった。幼児期は伊勢邸で養育された。

母は石清水神官善法寺通清の娘の紀良子で、義満は長男ではなかったが、義詮と正室の渋川幸子との間に生まれた千寿王が夭折し、その後幸子との間に子は無かったため、嫡男として扱われた。

母は順徳天皇の子孫で、その姉妹の仲子、崇賢門院は後円融天皇の生母だったので、義満は皇族と縁続きだった。

武家政権と南朝との抗争は続く

足利家の内紛でもあった観応の擾乱のあと、幕政をめぐる争いは深刻さを増していた。政争で失脚した細川清氏などの有力武將が南朝勢力に加担し、正平十六年／慶安元年（1361）十二月には、細川清氏や楠木正儀、石塔頼房たちによって京都が占領され、義詮は後光厳天皇を奉じて近江に逃れた。

そのため、義満は家臣に守られて建仁寺に逃れた後、北野義綱に護衛されて赤松則祐の居城・播磨白旗城に避難する。しばらくの間、則祐によって養育され、翌年、幕府・北朝側が京都を奪還したため帰京した。

義満の養育は・・・

京都に帰還した義満は新たに管領となった斯波義將に養育され、正平十九年／貞治三年

（1364）、七才で初めて乗馬したという。翌年五月、矢開の儀を行ない、六月には赤松則祐の屋敷で馬・鎧・太刀・弓矢等の祝儀の贈物を受け、養父である則祐とは親交を続けた。正平二十一年／貞治五年（1366）、後光厳天皇から義満の名字を賜り、従五位下に叙せられる。

義満は將軍家を継ぐ、

その年八月に貞治の変が起こって斯波高経・義将父子が失脚すると、叔父の足利基氏の推挙によって細川頼之が後任の管領に任命された。正平二十二年十一月、父・義詮が重病となり、義満に政務を委譲し、細川頼之に後見・教導を託した。朝廷は義満を正五位下・左馬頭に叙任、義詮が死去したので、義満は第三代將軍として足利將軍家を継いだのである。

武蔵平一揆を率いた河越直重

河越直重（生没年不詳）は、武蔵国の国人。武蔵平一揆の中心人物として知られ、武蔵国河越氏最後の当主である。平一揆とは、武蔵国の秩父氏一族、相模国の中村氏一族、その他常陸国・上野国の平氏などが血縁を軸として集結した関東有数の国人一揆（一揆とは共同体のこと、領主権の確保を目的とした連合形態を指す）で、河越直重は、正平七年／文和元年（1352）、閏二月から三月にかけて、武蔵野合戦（前号に既出）の小手指原の戦いで、足利方の先鋒として、直義派が加勢した新田勢を破る。

その後、東国の代表的な尊氏派として、武蔵国比企郡の笛吹峠の戦いで新田義宗を越後国に、宗良親王を信濃国に敗走させ、その功で翌年の正平八年／文和二年（1363）には相模守護職に任じられ、八月、尊氏が京都へ戻る際には鎌倉の留守を任された。

「ばさら大名」だった河越直重

延文四年（1359）十月、関東管領畠山国清に従って関東勢二十万余を率いて上洛した直重は、『太平記』によると、粋で華美な服装や奢侈な振る舞いを好む「ばさら」（派手な格好で振舞うイメージ）大名」の一人で、濃紫・薄紅など様々な色に染めた三十頭の馬を引き連れた入京で、京の人々の度肝を抜いたが、反発も買った。翌年七月には、畠山国清・細川清氏らとともに摂津国天王寺に出陣して仁木義長を破った。

康安元年（1361）十一月、畠山国清が足利基氏と対立して鎌倉を発ち、伊豆で挙兵すると、その翌年九月には基氏に従い、討伐軍として参加したが、国清は斬殺された。基氏の下で旧「直義派」の上杉憲顕が関東管領として復権すると、貞治二年（1363）、相模守護職を解任される。

氏満が二代鎌倉公方を継ぐ

既述したように、正平二十二年／貞治六年（1367）、鎌倉公方基氏と室町幕府將軍足利義詮が相次いで死去し、権力の空白状態が生じた。

父基氏の死去により、正平十四年／延文四年（1359）に生まれた氏満が跡を継いで二代目鎌倉公方となる。母は畠山家国の娘、清溪尼、ただし幼少のため、五月に京都から佐々木道誉が下向して、引継ぎの事務を行なう。

初代公方の基氏らによって復権した上杉憲顕が、平一揆勢力の削減に動くのではないか、また鎌倉幕府を支えるため、多くの火種を抱えた一揆側は、これを直接行動で打破しようとするのではないか、両者の対立する気運は触発の可能性を秘めていた。また鎌倉府の積年の課題を直接行動で打破しようとする機運は一揆側、反一揆側共に高まっていた。

武蔵平一揆の乱

正平二十三年／応安元年（1368）二月、上杉憲顕が上洛した隙を狙い、河越直重、高坂信重を指揮官として、武蔵国の平一揆が蜂起した。一族の河越氏、高坂氏、江戸氏、高山氏、古屋谷氏、新田氏、村山党などの武士が河越館に立て籠り、江戸牛島（現・墨田区）には別働隊を置いた。この作戦は入間川（現・荒川）を河越から江戸まで占領することによって、鎌倉府と憲顕の本拠地上野国を南北に結ぶ鎌倉街道を封鎖して、その連携を絶とうとした

ものという。これに乗じて下野国では宇都宮氏綱が、越後国では南朝方の新田義宗や脇屋義治も挙兵した。一方で中村氏を中心とした相模国の平一揆は上杉方についた。

反乱は鎮圧されたが・・・

上杉憲顕は帰国せず、政治工作を進めて足利政権を味方に付けた。上杉朝房（憲顕の弟、憲藤の子）は基氏の後を継いだ足利氏満（当時十才）を擁して河越に出陣した。憲顕軍や武田氏・葛山氏らの軍勢が動員され、同年六月の河越における合戦で反乱は鎮圧された。

勝利した鎌倉・上杉軍は、続いて越後で挙兵した新田義宗らを討伐するため北上した。上野において両軍は衝突し、激戦となったが下野の小山義政らが鎌倉方に加わったため兵数に劣る新田勢は壊滅した。義宗は討ち取られ、脇屋義治は出羽国にまで敗走した（それぞれ異説あり）。

鎌倉軍は引き続き北関東における南朝勢の掃討を進めたが、同年九月、老齢の上杉憲顕は下野足利の陣中で病没した（享年62才）。

名門河越氏の終焉

河越館城主で、弾正（弾劾を行なえる権限をもつ役所）少弼、相模国の守護だった直重は、平一揆を率いて河越館に立て籠もり、数か月にわたり抵抗した。しかし、上杉朝房軍との

激戦ののち敗北し、南朝方の北畠氏を頼って伊勢国へと敗走した。

ここに、平安時代から武蔵国の武士団の棟梁として「武蔵国惣檢校職」をつとめ、武蔵国最大の勢力を誇った名門河越氏は、ついに四百年の歴史を閉じた。

南朝は衰退して・・・

正平九年／文和三年（1354）十月のことになる。後村上天皇は河内天野に移り、南朝の勅願寺であった「金剛寺」（現・大阪府河内長野市）を行宮と定める。翌年の正平十年／文和四年（1355）一月、再び南朝に帰順した直冬を立てて京の奪回を目指したが、尊氏・義詮の軍に敗れて頓挫した。

正平十四年／延文四年（1359）十二月、「観心寺」（現・大阪府河内長野市）に移り、翌年九月には住吉まで北上した。正平十六年／康安元年（1361）、幕府の政争に敗れて失脚した執事細川清氏の帰順を受け、十二月に宮方の要人だった公卿の四条隆俊、正成の三男の楠木正儀らが都に攻め込み、一時的に京の奪回に成功するが、義詮軍の反撃に遭って退いた。

後村上天皇は住吉行宮で・・・

このころ、後村上天皇は摂津国の住吉大社宮司の津守氏の正印殿を行宮(住吉行宮)として、すでに十年近くも経っていたが、住吉大神を奉じる瀬戸内海の水軍を傘下にして、四国、九州との連絡網を使って活動することができた。しかし、正平十八年/貞治二年(1363)には、山名氏や大内氏が北朝に帰順し、楠木正儀の投降などによって、南朝の力はさらに弱体化したので、退勢を挽回することはできなかった。

南朝はなお強硬な姿勢を貫き・・・

正平二十二年/貞治六年(1367)四月、公卿の葉室光資を勅使として幕府との和睦交渉が行なわれたが、天皇は武家側の降伏を条件としたため、義詮の怒りを買った末に和議は決裂した。

後村上天皇は崩御される

後村上は労多くして病氣勝ちとなり、翌正平二十三年/応安元年(1368)三月十一日、住吉大社宮司津守氏の住之江殿にて崩御した。享年四十一才だった。



後村上天皇像 (来迎寺蔵)

浄土宗・来迎寺(大阪府守口市佐太中町)は後村上天皇の勅願寺

後村上天皇は和歌・書道に

和歌を二条為定に師事し、正平八年(1353)の『内裏千首』や同二十年(1365)の『内裏三百六十首歌』に詠進して、准勅撰集『新葉和歌集』には最も多い百首が入集された。歌集に「年中行事御百首」。『源氏物語』にも関心を寄せ、また、孤峰覚明に就いて禅を極め、琵琶・箏の音楽や大覚寺統の唐様を受け継いだ書道にも長けていたという。別名として「吉野殿」、「賀名生」殿とも。

南朝方の戦士だった後醍醐天皇の皇子たち

後醍醐天皇は数多の子女をもうけたが、『太平記』などに記述されている皇子たちは、1 護良、2 尊良、3 宗良、4 恒良、5 成良、6 義良、7 懷良で、共通する「良」の字は、「よし」とも、「なが」とも読まれている。

(1) 護良親王(1308～35)

延慶元年(1308)に生まれ、母は源師親の娘親子。幼くして天台宗・三千院に入り、天台座主に補任された。延暦寺の勢力を討幕組織に組み込むための布石だったという。元弘元年(1331)、後醍醐天皇が二度目の討幕に立ち上がる(元弘の乱)と、還俗して参戦し、弟の宗良親王と共に布陣した。しかし六波羅軍との合戦に敗れ、楠木正成の赤坂城に逃れた。この城も落ちたため、再起を期して畿内各地の野伏・地侍に令旨を発して反幕勢力を募る。十津川、吉野、高野山などを転々として二年にわたって戦い続け、播磨の赤松則村らによる京都侵入、六波羅攻撃を援護した。

元弘三年六月、後醍醐が帰京して新政府を樹立したとき、征夷大将軍の任官をめぐる足利尊氏と対立した。翌年十月、尊氏と阿野廉子(後醍醐の寵妃で、後村上天皇の母)の讒言を信じた天皇の命を受けた結城親光、名和長年らによって、清涼殿の和歌の席で捕縛された。

鎌倉に護送され、足利直義によって鎌倉二階堂の東光寺に幽閉される。建武二年(1336)七月、北条時行が鎌倉に侵攻した中先代の乱で、直義の家人によって殺害され、墓所は鎌倉市二階堂に在る。武家から天皇中心の社会に復帰させることに尽力した親王の功を賛え、明治二年(1869)、明治天皇は、護良親王を祀る神社の造営を命じ、「鎌倉宮」を創建した。

(1) 尊良親王(1310～37)

延慶三年(1310)に生まれたとされているが、1306年生まれで、後醍醐の第二皇子では、との説もある。公卿で歌人だった二条為世の娘・為子を母として生まれ、幼少時は吉田定房に養育された。宗良親王の同母兄で、嘉暦元年(1326)に元服して、中務卿に任じられた。勅撰集の『統後拾遺集』のほか、准勅撰の『新葉集』に入集された歌人として知られる。元弘の乱では、父後醍醐とともに笠置山に赴いたが、敗れて父と共に幕府軍に捕らえられ、土佐国に流された。しかし脱出して翌年九州に移り、その後、京都に帰還する。

建武二年(1335)、足利尊氏が天皇に反逆すると、上將軍として新田義貞とともに討伐軍を率いたが敗退した。翌年、九州に落ちた尊氏が力を得て上洛すると、義貞と共に北陸に逃れた。しかし延元二年/建武五年(1337)三月、尊良親王が拠った越前国金ヶ崎城に足利軍が攻め(金ヶ崎の戦い)、親王は義貞の子・新田義頭とともに防戦したが、敵軍の兵糧攻めにあい、遂に力尽きて義頭や他の将兵とともに自害する。自害の寸前、親王は義頭から落ち延びるように勧められたが、同胞たちを見捨てて逃げることはできないと述べて拒絶したという。

(11) 宗良親王(1311～85?)

前記した尊良親王の同母弟で、母が歌道の二条家出身だったので、幼い頃から和歌に親しむ。宗門に入り、正中二年(1325)、妙法院(京都の天台宗寺院)門跡を継承し、元徳二年(1330)には天台座主に任じられたが、元弘の変で捕らえられ、讃岐国(現・香川県)に流罪となる。

建武の新政で京に戻り、再び天台座主となるが、南北朝の対立が本格化すると還俗して宗良を名乗り、南朝方の武官として活動する。暦応元年/延元三年(1328)九月、義良親王とともに北畠親房・顕信に奉じられて伊勢国大湊(現・三重県伊勢市)から陸奥国府(現・福島県伊達市)に渡ろうとしたが、座礁して遠江国(現・静岡県西部)に漂着し、井伊谷の豪族井伊道政のもとに身を寄せる。

暦応三年/興国元年(1340)、足利方の高師泰・仁木義長らに攻められて井伊谷城が落城した後、越後国寺泊(現・新潟県長岡市)や、越中国放生津(現・富山県射水市)などに滞在した後、興国五年/康永三年(1344)、信濃国伊那郡(現・長野県)の豪族香坂高宗に招かれ、大河原(現・長野県大鹿村)に入った。宗良は、文中二年(1328)までの約三十年間にわたってこの地を拠点としたので「信濃宮」と呼ばれるようになる。その間に上野国や武蔵国にも出陣し、駿河国や甲斐国にも足を運んだという。

大河原は、伊那谷を南に下れば東海へ、また北上すると、諏訪を経て関東へと通じるので、「南朝の道」とも呼ばれた、後の『秋葉街道』の中心に位置していた。そのため、劣勢が続く南朝方にとっては重要拠点だった。

観応二年/正平六年(1351)、足利尊氏が一時的に南朝に降伏した「正平一統」の折りには、新田義興(義貞の次男)とともに鎌倉を占領して、翌、文和元年/正平七年(1352)には征夷大將軍に任じられた。しかし鎌倉を占領し続けることはできず、ふたたび大河原の地に戻った。

文和四年/正平十年(1355)諏訪氏・仁科氏など信濃の宮方勢力を結集して、北朝方の信濃守護と桔梗ヶ原で決戦を挑んだが敗れる。有力な氏族は離反して、南朝の勢力は大幅に低下した。

応安二年/正平廿四年(1369)には関東管領上杉朝房の攻撃を受け、頽勢を挽回できぬまま、文中三年/応安七年(1374)、三十六年ぶりに吉野に戻る。

この頃から南朝側歌人の和歌を集めた和歌集の編集を開始している。この和歌集は当初は私的なものだったが、長慶天皇は勅撰集に准ずるように命じた。弘和元年/永徳元年(1381)に『新葉和歌集』が完成して天皇に奉覧した。

それ以後は、確たる記録が残されていないが、宗良は、元中二年／至徳二年（1385）ころに遠江国井伊城で死去したという。但し異説もあつて、長らく拠点であった信濃国大河原で薨去したとする説も有力視されている。

(四) 恒良親王（1325～38）

後醍醐の寵妃だった、阿野廉子（かどこ、とも）（新待賢門院）を母として生まれた。義良親王（後村上天皇）・成良親王は同母弟である。

元弘元年（1331）、後醍醐の二度目の挙兵計画（元弘の変）が失敗して幕府に捕えられ、但馬国に配流される。元弘三年、足利尊氏の六波羅探題攻撃に参加する。

父の信望が厚く、新政下の建武元年一月、皇太子となる。新政が崩れると、建武三年／延元元年（1336）十月、尊氏の和平案に応じて京都に戻ろうとした父天皇から皇位を譲り受け、越前敦賀の金崎城に入つて、北陸地方で南朝勢力の興起をはかる。しかし翌年幕府軍の攻撃の前に城は落ち、同行していた異母兄の尊良親王や新田義頭らは自刃、恒良は落城のさい捕らえられて京都に幽閉されたが、延元三年四月に毒殺された。

(五) 成良親王（1326～没年不詳）

正慶二年／元弘三年（1333）、親王の宣下を受け、足利直義に奉ぜられて鎌倉に下向。建

武元年（1334）年、上野国（現・群馬県）太守に任じられる。翌年、中先代の乱によつて帰京し、征夷大將軍に任じられたので、將軍宮とも称される。建武三年／延元元年（1336）十一月、後醍醐天皇が神器を持明院統の光明天皇に授与し、足利尊氏の計らいで成良親王は皇太子となつたが、同年十二月、後醍醐が吉野に逃れたため廃された。

没年は、『太平記』によれば建武四／延元二年三月、越前（現・福井県）金ヶ崎城の落城で捕らえられた恒良親王と共に幽閉され、次いで毒殺されたと記されている。しかし異説もあつて定かではない。

(六) 義良親王（1328～68）

父のあと十二才で即位、南朝二代の後村上天皇として、父の遺志を継ぐ。正平一統で北朝の天皇と皇太子が廃され、京都帰還がなるかと思われたが、後光厳天皇をたてた足利義詮に念願を阻まれる。

南朝の京都への帰還を図り、大和国（現・奈良県）の吉野・賀名生、摂津国（現・大阪府）の住吉などを行宮とした。

南朝二代の後村上天皇として

後醍醐天皇の第七皇子として生まれ、建武の新政が始まると、幼くして、北畠父子に奉

じられ、奥州多賀城に向かう。翌年、北畠親子とともに尊氏討伐のために京へ引き返す。建武三年、行在所の比叡山で元服、尊氏が敗れて九州落ちすると再び奥州に赴く。しかし、延元二年／建武四年八月には再度上洛する。十二月に鎌倉を攻略し、西に向かう。翌年一月、美濃国青野原（現・岐阜県大垣市）で足利方を破り、伊勢・伊賀方面に転進した後、吉野行宮に入った。

父天皇の讓位を受けて踐祚

同年九月、義良親王は、宗良親王とともに北畠親房兄弟に奉じられ、伊勢国大湊から三たび奥州を目指す。しかし、途中暴風に遭って一行は離散し、親王の船は伊勢に漂着した。翌、延元四年／暦応二年三月、吉野に戻って皇太子となり、八月、父天皇の讓位を受け、十二才で踐祚した。

若年ながら、南朝二代後村上天皇は、畿内近国の寺社や武士に対して綸旨を発し、所領安堵や褒賞を行なった。

(七) 懷良親王（1329～1383）

南朝の征西大將軍として、肥後国隈府（現・熊本県菊池市）を拠点に征西府の勢力を広げ、九州における南朝方の全盛期を築いた。

建武新政は瓦解したが、このとき、再挙を図ろうとして、後醍醐は懷良親王を九州に派遣した。下向の時期については、暦応元年／延元三年（1338）ころか、ただし諸説がある。幼少だった親王は、事務方の官人、五条頼元らの補佐で伊予国忽那島（現・愛媛県松山市忽那諸島）に渡り、その地の宇都宮貞泰や瀬戸内海海賊衆だった熊野水軍の援助を得て数年間滞在した。

暦応四年／興国二年（1341）ころ薩摩に上陸、谷山城に在って足利方の島津氏と対峙しつつ九州の諸豪族の勧誘に努める。ようやく肥後国（現・熊本県）の菊池武光や阿蘇惟時を味方につけ、貞和四年／正平三年（1348）、菊池城（守山城や隈府城とも）に入って征西府を開く。この地を九州経営の本拠として、筑後征討に着手した。

観応元年／正平五年（1350）、観応の擾乱で足利尊氏とその弟直義が争うと、直義の養子足利直冬は九州に入る。筑前の少弐頼尚がこれを支援し、九州は足利方、直冬、南朝の三勢力の鼎立状態となる。しかし、文和元年／正平七年（1352）に直義が殺害されると、直冬は中国に去った。これを機に九州探題の一色範氏は少弐頼尚を攻めたが、頼尚に支援を求められた菊池武光は針摺原の戦い（現・福岡県太宰府市）で一色軍に大勝する。さらに懷良親王は菊池・少弐軍を率いて豊後の大友氏泰を破り、一色範氏は九州から逃れた。

一色範氏が去った後、少弐頼尚が北朝方に転じたため、菊池武光、赤星武貫、宇都宮貞久、草野永幸ら南朝方は延文四年／正平十四年（1369）の筑後川の戦い（大保原の戦い）でこれを破り、康安元年／正平十六年（1361）には九州の拠点、大宰府を制圧する。両軍合わせて約十万人の大軍が戦った。

足利方は斯波氏経（任：1361～1365）、渋川義行（任：1365～1370）を九州探題に任じて南朝方と対抗した。しかし相次いで敗退し、懐良親王は菊池氏の軍勢力を背景として、征西將軍府を優位に保つことができた。

ただし、応安四年／建徳二年（1371）、今川貞世（任：1370～1395）が九州探題として赴任して、その勢力は切り崩される。翌年、大宰府は陥落して親王らは筑後国高良山（現・福岡県久留米市）へと敗退を余儀なくされ、十一年に亘って九州に覇を唱えた征西府は崩壊した。

懐良親王の後継者は・・・

九州を征圧して京都回復を目指していた親王は、このとき征西將軍職を退く。時期については諸説があつて定かではないが、後継として良成親王（後村上天皇の第七皇子で、母は越智家栄の女・冷泉局／新待賢門院冷泉）とされるが、同時代史料には名が見えないため、疑う

説もある）が下向した。南朝勢力の衰退は覆うべくもなく、その後、懐良親王は筑後国矢部（現・福岡県八女市）に隠退し、弘和三年／永徳三年（1383）三月、この地で没したと伝えられている。

幼少で京都を出発してほぼ五十年、その後一度も京に戻ることはない生涯であった。

△参考文献△森茂暁『皇子たちの南北朝』



懐良親王像

日明貿易の道を開く

十三世紀から十六世紀にかけて、朝鮮半島や中国大陸の沿岸を荒らす海賊や、私貿易・密貿易を行なう商人は「倭寇」と呼ばれた。主に日本人だが、一部には高麗人、中国人も含まれていたようだ。

1368年、中国で明王朝が建国されると、応安二年／正平二十四年（1369）、明の太祖（開国の祖）からの国書が使者楊載らによって、懐良親王のもとに齎された。内容は、東シナ海沿岸で略奪行為を行なう倭寇の鎮圧を「日本国王」に命ずるというもので、もし海賊を放置するならば明軍を遣わして海賊を滅ぼし、「国王」をも捕えるという書面だった。そ

ここで懐良は、国書を届けた使節団の一部を殺害し、楊載らを三ヶ月勾留した。

翌年、再度高圧的な国書が、明の洪武帝から、使者趙秩らの手で、懐良に遣わされた。九州での地盤固めに明の権威を利用しようとしたためか、あるいは朝貢貿易の利益を得るためか、懐良は最終的に折れ、特産品を貢ぐとともに、倭寇による捕虜を送還したという。一方、明は懐良を「良懐」の名で「日本国王」に冊封さくほう（名目的な君臣関係となること）した。その後、懐良の勢力は後退し、1372年、博多に到着した明の使者は、博多を制圧していた九州探題（任期：1370～1395）の今川貞世さだよ（法名：了俊りょうしゅん）に捕えられる。

明側では「良懐」を冊封したことを既成の事実として、後に足利義満が日明の「勘合貿易」を開始して、新たに建文帝から冊封をうけるまで、明に使節を送る場合には「良懐」の名義を用いねばならないという事態となった。その足利義満も、当初は明国から、国王位を争っている臣下と看做され、外交関係を結ぶ相手とは認識されなかった。

義満は家督・將軍職を相続

正平二十三年／応安元年（1368）に評定始が行なわれ、四月には管領細川頼之を烏帽子親として元服する。翌年、正式に將軍に就任し、細川頼之をはじめ、足利一門の守護大名の主導により帝王学を学ぶ。頼之は寺社本所領事ほんじよりのじ（所領訴訟に対する基本方針を定めた法令で、応安大法とも呼ばれる）を定めて土地支配を強固なものにし、京都・鎌倉の五山制度を整えて宗教統制を強化する。また南朝最大の勢力圏であった九州に今川貞世（了俊）・大内義弘を派遣して、南朝勢力を牽制した。

京都を支配する・・・

京都の支配を強化するために、応安三年（1370）には、朝廷から山門公人（延暦寺及びその支配下の諸勢力及びその構成員）に対する取締権が与えられた。

文中三年／応安七年（1374）、宮中に影響力を持つ叔母・日野宣子の仲介によって、日野業子を御台所みだいどころに迎え、翌年の永和元年には、義満の執奏により、後円融院は、二十一代集の二十番目となる「新後拾遺和歌集」の勅撰を下命した。

室町に政庁を開く

天授四年／永和四年（1378）、邸宅を三条坊門より北小路室町に移して政庁とした。室町通に面して正門が設けられたことから室町殿、室町第とも呼ばれた。のちに通称とし

て「花の御所」なる。この將軍の居所にちなんで足利將軍(家)の事を「室町殿(室町家)」と呼ぶ。江戸時代中期から、武家政権の名称として「幕府」の用語が使われるようになり、足利家の政権を「室町幕府」と呼称するのはこれに由来している。

つづく

南朝の行宮は吉野から賀名生へ、そして住吉へ

吉野行宮

京都に幽閉されていた後醍醐天皇は、延元元年／建武三年(1336)十二月に脱出し、穴生を經由して現・吉野山の吉水院に入り、金峯山寺の塔頭(子院)・実城寺を行在所と定めた。だが後醍醐は、延元四年／暦応二年(1339)八月、後村上天皇に譲位した直後にこの行宮で崩御される。

正平三年／貞和四年(1348)一月、足利軍が吉野に侵入して行宮を焼き払ったので、後村上は「賀名生」行宮に移る。その後、長慶天皇が文中二年／応安六年(1373)八月、行宮を吉野に戻したが、維持することができず、天授五年／康暦元年(1379)九月以前に行宮は「栄山寺」(現・奈良県五條市)に移された、という記録がある。

「吉野朝」とも称される南朝五十六年のうち、吉野に行宮が置かれたのは二十年弱だったようだ。

賀名生行宮

正平三年／貞和四年(1348)八月、吉野行宮を襲われた後村上天皇は大和国吉野郡賀名生(現・奈良県五條市西吉野村賀名生)に逃れて行宮とする。賀名生は元は「穴生」と書かれ、後醍醐天皇が京都を脱出して吉野に逃れる際に穴生を經由したことが知られている。

後村上天皇が皇居をこの地に移したとき、南朝による統一を願って叶名生と改め、さらに正平六年／観応二年(1351)、「正平一統」で統一が叶うと「賀名生」に改めたという。のちに読みを「かなう」から原音に近い「あのを」に戻された。

正平七年(1352)の正平一統による北朝の一时的な崩壊を受けて、後村上天皇は同年二月、京都を目指して出立するが、入京することが出来ないまま五月に捕虜とした北朝の上皇たちを

連行して賀名生に戻った。その後、正平九年／文和三年(1351)十月、行宮を河内国の「金剛寺」(現・大阪府河内長野市)に移した。

さらに長慶天皇、後龜山天皇の時代にも、行宮が置かれたが、正平十五年／延文三年(1360)には南朝内部の内紛で火災となり、焼失したという。行宮の位置については、和田地区にある堀家の敷地に設けられたと伝えられているが、確定には至っていない。

住吉行宮

現・大阪市住吉区に所在する住吉大社の南に位置し、歴代宮司を務める津守氏の住之江殿(正印殿)の中におかれた天皇の御座所(皇宮)で、後村上天皇は、正平七年(1352)二月と、同十五年(1360)九月～二十二年(1368)三月、崩御されるまでの間行宮とされた。次の長慶天皇は住吉行宮で即位し、正平二十三年十二月に吉野に移つたとされる。

住吉大社は宮司の津守氏が南朝方であり、また、住吉大神は海の神で、住吉大神を奉じる瀬戸内の海人たちを掌握でき、住吉や吉野と九州や四国との連絡網を確保できたので、瀬戸内海をはさんで九州や四国の南朝との連絡に役立つたようだ。



賀名生の里のいま

出典： <http://www.geocities.jp/kitadewa/mukasi-anou.htm>



住吉行宮跡

南北朝の年表

長慶天皇		後村上天皇																				南																																			
後光厳天皇													空位	崇光天皇			光明天皇					北																																			
1369	1368	1367	1366	1365	1364	1363	1362	1361	1360	1359	1358	1357	1356	1355	1354	1353	1352	1351	1350	1349	1348	1347	1346	1345	1344	1343	1342	西暦																													
応安2年	正平24年	応安元年	正平23年	貞治6年	正平22年	貞治5年	正平21年	貞治4年	正平20年	貞治3年	正平19年	貞治2年	正平18年	貞治元年	正平17年	康安元年	正平16年	延文5年	正平15年	延文4年	正平14年	延文3年	正平13年	延文2年	正平12年	延文元年	正平11年	文和4年	正平10年	文和3年	正平9年	文和2年	正平8年	文和元年	正平7年	観応2年	正平6年	観応元年	正平5年	貞和5年	正平4年	貞和4年	正平3年	貞和3年	正平2年	貞和2年	正平元年	貞和元年	興国6年	興国5年	康永3年	興国4年	康永2年	興国3年	康永元年	興国3年	南北朝 元号
足利義満は三代将軍となる	後村上天皇住吉で崩御される	二代将軍義詮死去する		義詮は三乗坊門万里小路の邸に移る		足利基氏は鎌倉に戻る		正平の大地震が発生する	二代将軍義詮赤坂城を攻め落とす		足利尊氏は死去する	南朝方に軟禁された光厳上皇は帰京する		足利直冬の京都奪還は失敗する	河内天野の金剛寺に行宮を移す	足利基氏は入間川陣に移る	足利直義は急死する。北畠親房が正平一統を破棄。尊氏、征夷大將軍を解任される。八幡の戦い	足利尊氏が一時的に南朝に降伏し、正平一統が成立	観応の擾乱起る	足利基氏は鎌倉公方となる	吉野行宮が陥落する			天龍寺、落成供養が行なわれる			天龍寺船、元に渡航する	主な出来事																													

本紙「市民プレス」は年四回（二、四、七、十月、各五日）発行